



目

次

創刊にあたって	2	審査を終えて	11
本校図書館について	3	推薦図書	12
読書感想文コンクール	4 ~ 12	利用統計	13 ~ 14
入賞者、審査委員	4	図書館から、スタッフ紹介	15
入賞作品紹介	5 ~ 10	郷土の文化財(萩ノ尾古墳)、編集後記	16

創刊にあたって

校長 高松康生

ほとんどの学生諸君が知らない昔のことですが、校史を遡ると有明高専で最初の図書館広報紙である「図書室報」第1号が発行されたのは、学校創立後間もない昭和38年7月です。B4版紙の片面に謄写版で印刷されたこの広報紙は、「蹊(こみち)」と命名されて昭和40年7月発行の第10号まで出ましたが、そこで休刊となり、この状態が約7年間続きました。

しかし、昭和47年、現図書館の竣工を機会に、本校の学校広報紙である「有明高専だより」の中に「図書館だより」のページが新設され、同年5月発行の第12号から毎号、図書館の利用案内、利用状況、新着図書紹介、新刊書評といった情報に加えて、学生の読書感想文、利用者の声、教職員からの投稿文などが掲載されるようになりました。そして、以後このページを通じて図書館に関する広報活動が行われて来たのです。

ところが、魅力ある学校広報紙作りの活動が始まつて「有明高専だより」の編集方針が見直され、平成3年9月発行の第76号から「図書館だより」のページが廃止されることになりました。この紙面内容の刷新により「有明高専だより」は、その後、文部省国立大学等優秀広報紙コンクールで、高専部門最優秀賞を含め4回の受賞に輝くことになりましたが、図書館の広報活動のほうは、学生図書委員が主体となって年6回発行している「図書館俱楽部」の紙上で、新着図書の紹介などを続けるといった厳しい状況に置かれることになりました。

私が本校に来たのはその約半年後でしたが、「有明高専だより」第75号に掲載され、19年続いた「図書館だより」の最後のページとなった、当時の図書館長木佐木教授の「読んでもらえないで本が泣いています」という学生諸君への呼掛けを読んで、何とかして学生諸君にもっと本を読んでもらえるよう、図書館を利用してもらえるようにしたいという、強い思いを抱きました。そしてそのための呼び水の一つとして、昭和40年以来途絶えている図書館広報紙を復活させたいと考え、それを願って来ました。そのようなわけで、このたび宮川図書館長をはじめ、図書館の運営に携わっておられる教職員の方々のご尽力によって、こうして図書館広報紙が再び刊行されるに至ったことを双手を挙げて喜んでいます。

高専図書館の学生教育における役割は、一つは一般科目及び専門科目の各教科に関する教科書、参考書と専門学術書を備えて、学生諸君の勉学と研究の便に供することであり、もう

一つは人文科学、社会科学及び自然科学に関する優れた図書を備えて、人格形成途上にある高専生諸君に、読書を通して精神的栄養を供給し、情操を養い文化的教養を身につけさせることにより、均衡のとれた社会観を確立させる手助けをすることにあります。後者は、技術と社会が一体不可分の関係にある現代社会の技術者教育において、欠くことの出来ない大切な事柄であります。

ところで、近頃は情報伝達に用いられる媒体が多様化し、図書など印刷された文字という旧来の媒体に加えて、テレビに代表される電子映像を媒体とした情報伝達が生活の中に充満しつつあります。電子映像は、確かに人間の感情や心の動きなど、文字での伝達が苦手とすることを、表情や雰囲気などで鮮明に伝えてくれる魅力ある優れた情報伝達媒体です。

しかしながら、映像媒体の最大の弱点は、本ならばすぐ理解出来なくても、幾度も読み返し自分で考えることによって、自分なりに考えをまとめながら読み進むことが出来るのに対して、はてな?と思っても映像は待ってはくれず、物事をゆっくり深く考える時間を与えてくれないことです。パスカルの「人間は考える葦である」、デカルトの「我考える、ゆえに我あり」といった言葉を引用するまでもなく、人間であることの証の一つは「自分で考える」ことです。そして、図書は自分で考えるのに適した情報伝達媒体です。

今後は、本紙と「図書館俱楽部」の双方を通じて、図書館に関してより多くの新しい情報が学生諸君に提供されるようになりますが、これをどう生かしていくかは諸君の意識にかかっています。諸君が図書と図書館をより積極的に利用し、豊かな精神を培い、深い学識を修めてくれることを心から願ってやみません。



本校図書館について

図書館長 宮川英明

「有明高専図書館報」創刊号を発行する運びとなり、関係各位のご協力、ご支援に対し心から感謝申し上げる。創刊にあたり、これまでの図書館の経緯、今後の課題や抱負について述べたい。

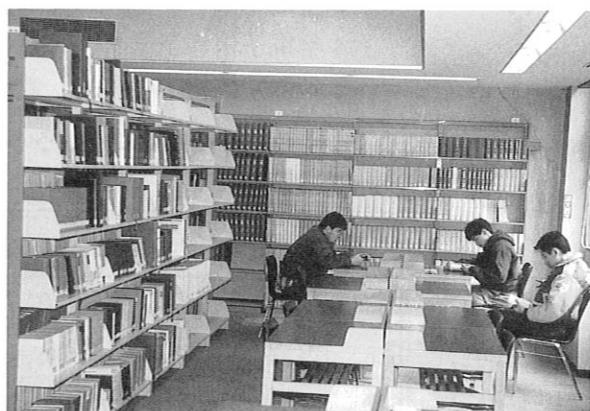
本校は昭和38年4月20日に開校した。開校からわずか17日後の5月7日に図書室開設についての協議が始まられ、9月1日に図書室運営にかかる諸規定の制定を経て、翌2日荒尾市増永の仮校舎において図書室が開室された。したがって、昭和38年9月2日が有明高専図書館の誕生日となる。翌39年4月14日この萩尾台の新校舎に移転、現在のＬＬ教室が図書室となった。その後、全国の高専に先駆け、「高専図書館はいかにあらるべきか」について全校挙げての検討がなされ、この研究成果を踏まえ、47年4月8日に現在の図書館が竣工し開館した。

創設間もない頃の図書貸出冊数は、年間一人当たり約40冊で、平成6年度の約10倍である。よく読まれたのは、日本文学では、夏目漱石、島崎藤村、吉川英治、田山花袋、芥川龍之介、志賀直哉、有島武郎の順で、漱石は1年半（開館日数533日）で、実に延べ821冊貸し出しされている。外国文学では、トルストイ、マルタン・デュ・ガール、ドストエフスキイ、ロマン・ロラン、シェークスピア、ヘッセ、ショーロフ、ゲーテの順となっていて、トルストイは3日に1冊は貸し出されている勘定になる。当時の図書室は、休み時間や放課後になると「満室につき入室おことわり」の盛況であったと聞く。時は流れ、社会は様々な情報に溢れ、軽薄短小の世となり、学生の足は次第に図書館から遠のくようになった。しかし、よろこばしいことに、最近また、入館者、図書貸出冊数共に増加に転じたようである。この傾向が続き、学生で満ち、しかも静寂な図書館が再びよみがえる日が遠くないことを願う。

平成6年3月に文部省がおこなった図書調査によると高校生の一月当たりの平均読書量は1.9冊で、上学年になるほど減少している。さらに、同報告書は「精神的に伸び盛りの時期に読書量が少ないので問題」と指摘している。その読書量の落込みの一因は受験勉強にあるらしい。有明高専学生の実態調査によると、一部

の学生を除いて諸君の読書量もまた寂しいものである。高専は受験勉強のない5年間一貫教育の学校であり、諸君には自由に使える十分な時間とエネルギーがある。高専生であることに誇りを持ち、読書をとおして豊かな心を育て、視野の広い技術者になってほしい。

近年、(1) コンピュータの情報処理速度、量の飛躍的発展、情報ネットワーク網の整備、(2) A V、C Dなどの文字以外媒体による情報の多様化、青少年の活字離れ、(3) 急速な科学技術や社会の発展による生涯教育の必要性の増大など、図書館をとりまく諸情勢が急激に変化している。本校図書館においても、このような情勢の変化を踏まえて(1) 図書情報データベースの構築とコンピュータによる検索システムの強化、インターネット、校内L A Nを介した、学術情報センターとの接続による利用者サービスの向上、(2) A V設備等の導入による図像音情報サービスの提供、(3) 地域の公共図書館との相互協力と地域への一般開放、そして何より(4) 学生および教職員の学習・研究活動を支援するための、ソフト、ハード面での施設設備の充実、レファレンスサービスの向上など、各方面の理解と協力を得て、ここ数年以内に解決したい問題が山積している。このような図書館の充実、発展には、多額の費用を必要とする。図書館への投資が無駄にならないよう、学生諸君の知的好奇心に期待したい。図書館運営に携わる私たちも常に心を引き締め、努力を怠らないよう努めたい。



読書感想文コンクール

昭和57年度から6年間実施され、その後途絶えていた読書感想文コンクールを復活することになりました。過去の統計を調べますと、コンクールが実施された期間の図書貸出冊数はその前後よりかなり多くなっており、コンクールが果たした役割は少なくなかったものと思われます。

読書の必要性やその意義については今更述べるまでもありませんが、すらすらわかるものを読んでもあまり意味はなく、読み返しながら、活字の奥にあるものを探り、新しい発見や出会いに感動するところに読書のよろこびがあります。耕す自分の高さに応じて活字の奥にある世界が見えたり見えなったりします。感想文を書く作業は感受性、想像力、思考力、構成力の創造的活動を培い、自己の主張を文章表現することできます。

アントール・フランスは「私が人生を知ったのは、人と接触した結果ではない。本と接触した結果である」と述べています。この感想文コンクールは学生諸君に本との出会いを提供する場です。

図書館運営委員および国語科をはじめ一般科目の協力も得て、このコンクールが実施できました。応募総数は392篇でした。3年生以上の応募がもう少し多かったら、もっとすばらしいコンクールになったのではないかと思います。次回は上級生も積極的に応募してほしいものです。審査講評で焼山先生も述べられているように、質の高い作品が多数あり、私もここちよい満足感と感動を覚えました。一次審査で45篇が選ばれ、二次審査で入賞作品10篇が選ばされました。入賞された学生はもちろん参加したみんなに心から拍手を送ります。

(図書館長 宮川英明)

入賞者

最優秀賞

2年電子情報工学科 塚本 貢也 『こころ』について

優秀賞

1年物質工学科 森田 玲子 良秀に学ぶ人の生き様

2年物質工学科 笹井恵美子 『こころ』を読んで

佳作

1年建築学科 大戸 奏子 『地獄変』を読んで

2年電子情報工学科 長野真理子 『こころ』について

2年電子情報工学科 吉田 誠 『こころ』を読んで

2年物質工学科 森 聖子 『こころ』を読んで

2年建築学科 柴田 理恵 『こころ』を読み終えて

4年電子情報工学科 真弓 敬志 『鼻』とダイエット

4年電子情報工学科 武藤 直美 『黒い雨』

審査委員

一般科目	国語（運営委員）	焼山 廣志
	国語	岩本 晃代
	英語	中本 潔
	社会	山口 英一
専門学科	電子情報（運営委員）	堀切 淳一
共通専門	物理（図書館長）	宮川 英明

読書感想文コンクール入賞作品



『こころ』について

2年 電子情報工学科
塚本 貢也

私はあまりこのような種類の本は読まない。だから小説の冒頭辺りではおもしろいとは思わなかった。だが、次々と読み進むうちにあたかも実際に経験したかのような表現の世界にのめりこんだように思う。

この『こころ』のおもしろさの一つは、小説の、「上」の部分に、「下」の後のことがそれとなく書かれているところではないだろうか。さらに「下」に書かれた「先生の遺書」を読むことにより、「先生」と「私」の二つの視点から物事を見ることができ、双方の客観的な見解を知り、小説に深みが出てよりおもしろくなっている。

『こころ』の「上」で先生は、落ち着いた面持ちを目で見ないまでも連想させたが、「下」では人間の業との心の中での葛藤を目で見るまでもなく感じさせた。人の心の表と裏の違いの激しさを知り、物事の全容を知っても、なお「私」が先生を尊敬した気持ちが私にはなんとなく分かるような気がする。先生は、自分の「K」に対するそれに、その人間のエゴに、ただ負けはしなかった。人間が生まれながらにもつその本能の強さに若き「先生」は流されはしたけれども、後にその業を正面から正視したその姿に私や「私」は尊敬の念を抱くのである。結果、先生は自殺を選んだ。私は（私が先生の心情をまだ十分に理解していないからなのかもしれないが）この「業からの逃亡」を私は正しいとは思わない。少なくとも、今の冷静な私からみて、正しいとは思えない。先生は妻に真実を伝えると言った。しかし、伝えるべきだった。純白に汚れを付けたくないなどといった方便で自らのエゴを隠し、妻の心に深い溝を刻むことに対し私は、人の不完全さと、人の本能に潜むエゴの恐しさを改めて感じた。さらに、「死」を選ぶなどとは…。私は人が、進化の過程で作り出した弱さに驚愕した。

ただ、「私」は、妻が生きている中で、私達に「先生の遺書」を伝えようとしている。先生に対する反逆的行為ともいえるこの行為を、私は嬉しく思う。そこ

には昔の人の「かたさ」がないと思う。「私」にも、どこか「かたさ」より「かるさ」を感じる。私はこの進化ともいえる人の心持ちの変化を嬉しく思う。「固執」から「柔軟」への移り変わりを果たせれば、先生も苦しむことはなかったと思う。しかし、偏った知識が彼をそうさせなかつたのではなかろうかとも思う。ここまで知識人の苦悩を書き尽くせる漱石に、改めて敬畏の念を抱くのである。



良秀に学ぶ人の生き様

1年 物質工学科
森田 玲子

この物語の中で、良秀は何を思い、何を求めて生きたのか。それは、正しい解答を得ることのできない難題だろう。しかし、一つだけ、私が解答として感じたことがある。それは、良秀は決して、他人に同情を向けられることを、潔しとはしなかつただろうということだ。何の同情がいろうか。良秀は死ぬまでの、その決して長いとはいえない人生の間で自分が確かにそこに存在したのだという証、それも、自分で十分に納得できるほどのもの。そう、『絵』をこの世に残すことができたのだから。

良秀の生きた証。それを自分自身にうつして考えてみよう。私がこの世に生き、良秀より長い年月を、過ぎていく時間に刻みこむとして、この世に何か残せるものがあるとしたなら、それは一体どんなものなのだろうか。いや、本当に残すことのできるほどのものがあるのだろうか。私は、どんなに長い年月を生きるとしても、ただ存在するだけの人間ではありたくない。良秀が残した『絵』のような証を、私も残したい。

良秀は、『絵』を残すために、良秀にとって、最も大切だったものを捨てた。それは、ただ一人の愛娘だった。私が、もし同じ状況にあったとしたら、同じことを行えるだろうか。

私にとっての大切な人が、私の思い描く夢の為に、窮地に立たされたとする。その時、私がとる行動は、自分のために、大切な人を切り捨てるとか、それとも、救うことなのか。私はきっと、大切な人を救おう

とすることだろう。良秀は笑うかもしれない。「だからお前たちは馬鹿だというのだ。」という風な捨てゼリフでも残して。それでもきっと私はめげずに、次の夢を見付け、証を求めて歩んでいくことだろうと思う。

良秀は、最後に娘の死を描いた後、自殺した。それは、娘を死に追いやったことへの、後悔によるものだったかもしれない。しかしそれでも良秀は、満足だったのではないだろうか。最高の絵を残すことができて。絵の中に自分の人生をこめることができて。そして自分が確かにそこに生きたのだという証を、残すことができて。

私には決してできないであろう生き方をした男、良秀。私は彼と同じ生き方をする気持はない。しかし、良秀の生き様は尊敬に倣する。そう私は感じた。



『こころ』 を読んで

2年 物質工学科
 笹井 恵美子

人間は矛盾だらけである。そして人間はとても弱い。しかし、それで良いと思う。それでこそ人間だと思う。良い所だらけの完璧な強い人間などいないから。人間は醜くて弱くても良いと思う。

この小説には、このような人間の弱さや醜しさが鋭く描かれている。私はこの小説を読んで、人間が日々生活していくうえで常に直面する悩み・悲しみについて深く考えさせられた。

人間は自分の直面した問題に人知れず悩み苦しみ心を傷つけている。この小説の中の先生もまた、足がつかないプールでうまく泳げず、もがくように長年苦しんでいた。またKも同じように悩み苦しんだ。そして二人共、死を選んでしまった。しかし私はこう思う。
「悲しみは続かない」

悲劇のヒロインはみんなミスキャストなのだ。どんなに不幸が似合っているように思っても、他人から見れば不似合いなのだ。ミスキャストは降番させられる運命にある。心に分析力や透視力があり過ぎる人は、悲しみの深さが計れる分、未来に疑問や怒りや絶望を感じ易いのかもしれない。同じ悲劇にぶつかった時、頭の良い者ほど悩み、傷つき、路頭に迷う。彼らは頭が良すぎた。

しかし人間は弱いと言いながらも、その苦しみを乗



り越えなければならない。乗り越えた時、人は強くなり成長していくのだと思う。そしてその悲しい過去は自分にとって良いものへと変わっていくのだろう。幸せは幸せな思い出にしかならないが、不幸は宝物に変えることができる。幸せは心の視力を悪くする。幸せに酔ってしまうからだ。くじけた時こそ、自分を見つめ直す絶好の機会だと私は思う。死にたいと思うほど傷ついたことがある人は、将来立派になるのかもしれない。そしてその時、悲しい過去はその人にとてかけがえのない宝物となるのだろう。悲しみは得にこそなれ、損にはならない。

人間には良い所も悪い所もある。人間は醜い心も持っているけれど、それ以上に素晴らしい心も持っている。だから先生にも、自分の過去を責めるばかりではなく、自分の素晴らしいものを認めて欲しかった。そして自分の過去を許して欲しかった。自分の過去を許すということは、自分の過去を愛するということだと私は思う。愛せないうちは、人はその過去を人に隠そうとする。けれど隠して、人から愛されたとしても、それはごまかしであって、偽物だ。自分を嫌っているうちは、悲しみの影はいつまでも付きまとつ。

私は今まで本を通していろいろなことを学んできたが、今回のこの『こころ』を通して人の悩み、悲しみについて学んだように思う。



『地獄変』 を読んで

1年 建築学科
 大戸 奏子

初めての芥川龍之介の世界。読み進む内に物語の中に引き込まれていく。じらされる様な気持ちで「まだか、まだか。」と私が待っていたのは何だったのか。

良秀の様な自己中心的な人でなければ或いは、芸術を極められなかったのかもしれない。美しさより醜さを求め、人を人と思わない良秀は、やはり度を越している。良秀の娘への情愛がなければ、私は彼を鬼としか見られなかつたであろう。娘もまたよく出来た娘なのである。父親の分、いつも周囲に気を使っていたはずだらうに…。

大殿様は良秀を試すつもりだったと私は思いたい。一枚の絵の為に実の娘を犠牲にするなど、いくら良秀でも、と言う所だろうか。

しかし良秀は「愛する娘が苦しむ姿」をどうしても描きたかったのではないか。自分が愛する娘を苦しめる事で本当に地獄を味わうのは、父親の良秀。違うだらうか。「地獄変」を極める為には自分が地獄を体験しなければ描けないと思ったのではないか。

絵を一枚仕上げる度に何かを犠牲にしていた良秀。しかし今までの作品には心が無かった。「地獄変」がたくさんの人を魅了したのは、最高の絵師が心から感じた「地獄」を描いたからだと思う。やはり最高の芸術を極める事のできる人間は、天才で自己中心的で、一人の者を心から愛する哀れな人間だった。

私が待っていたのは、絵の完成と、良秀の「死」。私は取り憑かれていたのだ、良秀に。地獄変を描いている時の良秀には魂しか残っていなかった筈だ。早く死にたかっただろう。天上で、心優しく、愛に満ち溢れた生活を娘と二人で一緒に過ごしたいのだ。

今、私は、良秀は幸せなのだと思う。

初めての芥川龍之介の世界で私が出会った者は、才能の余り地上で幸せを得る事ができなかった、一人の男だった。



『こころ』 について

2年 電子情報工学科
長野 真理子

人は誰でも一度、自分の意思に反したことを行つたり、したりしてしまうことがある。主人公のしたことと同じようなものだ。Kの気持ちを知っているのに、「お嬢さんと結婚させてくれ」などと普通ならば言えない。だが、その時ばかりは普通ではなかつた。頭よりも先に、体が動いた。Kからお嬢さんを取り上げてしまった。そのせいなのか、それとも挫折ばかりの自

分の人生に嫌気がさしたのか、Kは自殺した。そして何十年かの後には「先生」と呼ばれる主人公も、自らの命を断つてしまうのである。

先生は何故、自殺したのだろうか。それはKに対して死にでもしないことには罪を償い切れないという気持ちも、確かにあったには違ひないが、もしかすると、Kと同じく、自分の人生に大概嫌気がさしたのかもしれない。信じていた人に裏切られ、そしてまた、自分も自分を信じてくれていた人を、たとえそれが無意識であったとしても、明らかに、裏切った。

しかし、もし私が先生ならば、自分から死にはしない。そういうことは、「お嬢さんを大切にする」という過去の意志に矛盾するし、また、死んだところで、それは単なる「自己満足」に過ぎないとと思うからだ。生きて、お嬢さんを大切にするのが、本当の意味での「償い」のような気がする。しかし、そう言ってしまえばそれまでだ。きっと私がまだ若いから、という理由で見えない何かがあるのだろう。何しろ、この世の中で最も不可解なものは、人の「こころ」なのだから。他人のこころなどというものは、いくら年をとってもいくら分かった振りをしてみても、本当はたいして分かってなどはいないのだ。そして時には自分自分のこころさえも、分からなくなることがある。丁度、意思に反したことを言ってしまった先生のように。

この話を読むことで、私はとある疑問を抱いた。それは、一つしかないものを二人で同時に欲しくなったときどうするか、である。それが分けられるものならば、二人で分けてしまえばよい。しかし、分けられないもの一即ち、人のこころのようなものは、無論、二人で分けるわけにはいかない。そんな時、二人はお互いに破滅してしまうより他、道はないのだろうか。



『こころ』 を読んで

2年 電子情報工学科
吉田 誠

私が『こころ』を読み終わって、まず感じたのは解放感だった。第一には、興味を持って読み始めた作品ではないからだろうと思う。そして、第二には、最後の章が、遺書という重苦しい文章だったからだと思う。この「遺書」を読んでいて、先生の苦しみがよく伝わってきたが、果たして先生と「K」とではどちらが苦し

かっただろうか、とふと考えさせられた。

先生の「遺書」を読んで、やっと墓参りや先生の幾つかの発言の意味が分かったとき、私は先生がとても気の毒に思えた。思いが叶い、やっとお嬢さんと結婚したというのに、少しも幸せではなかったと思う。私は、先生がした幾つかのことよりもむしろ「K」がしたことのほうが、残酷に思えた。

それは、確かに、先生は「K」をだましたと言えるだろう。しかし、「K」はお嬢さんのことが好きなら、自殺するよりも他に道があったと思う。この「遺書」が先生によって書かれたものだったために、先生から見たことしか書いていないからかもしれないが、私から見て、「K」の自殺は先生への当て付けとしか思えなかつた。「K」の遺書に先生への恨みなどが一言も書いてなかつたことも、私には憎らしく思えた。

しかし、私が「K」より先生のほうが苦しかつただろうと思った最大の理由は、「K」は死を選び、先生は生き続けた、ということだ。

先生の結婚を知った「K」が、自殺を決意するまで、たった二日間しかなかつた。言い換えれば、二日間だけが「K」の苦しみの時間だったのだ。

そして先生は「K」が自殺してから自らが自殺するまでに、何年もの間、自分を責め続け苦しみ続けた。私にはこの差が、とても大きく思える。

私ならどうするか。「物事の決着」に、自らの命を絶ち、苦しみから逃れようとするだろうか。いや、私にはできないことだ。なぜなら、私が強い人間だからという訳ではない。それは、積極的に「死」を選ぶことが怖いからである。

私が『こころ』を読んで考えたことは、罪悪感を持ちながら生き続けることがいかに苦しいかということである。もしできるなら、苦しまずに生きたい。しかし、たとえ苦しみの中であっても生き続けなければならぬ。それは「死」が最良の解決法ではないと思うからだ。



『こころ』 を読んで

2年 物質工学科
森 聖子

『こころ』の中には悲しいことがたくさんあり過ぎた。読んでいくうちにだんだん辛くなってきた。中でも、

「K」と「御嬢さん」、そして「私」の三人の関係から沸き出した悲しい出来事は、私にいろいろなことを考えさせ、今までに経験したものとは違うショックを与え、今も心に焼きついて離れない。きっと、「私」も私と同じような、あるいはもっと苦しい心境に追い込まれてしまい、最後までその重みに耐えきることができなかつたのだろう。

「私」は、どうしてもっと周りの人達を信じてあげられなかつたのだろう。心から信用していた叔父に裏切られたことを考えると信じられなくなってしまった気持ちもわかるけれど、親友の「K」や、愛する「御嬢さん」くらい信用できなかつたのだろうか。私はどんな事情があろうと、「K」に「御嬢さん」のことが好きなことを告白しなかつた「私」をずるいと思った。

「K」の方が先に告白して、後から言いにくかったと思う。でも、相談を受けておきながら、「K」には気付かれないように、奥さんに「御嬢さん」との結婚を申し込むなどといった事はあまりにも卑怯なやり方だと思う。結局「私」も人の手に乗らないようにしようとするあまり、叔父と同じようなことをしてしまつたのだと思う。私は読んでいる最中、早く「私」が「御嬢さん」を好きなことを告白して堂々と「御嬢さん」を取りあつて欲しいと思っていた。「御嬢さん」を思う気持ちが本当に強かったのなら、それくらいして欲しかつた。結局、それができなかつたために後で彼女までも苦しめてしまったのだと思う。「私」がちょっと勇気を出せば、こんなに苦しいことが重なることもなかつたのかもしれない。「K」が自殺することも。「K」にとっては、「私」がしたことは裏切り以外のなにものでもなかつたと思う。「K」の死は、「私」をどうしようもなくさせ、人生に覆いかぶさつた。それは、「K」が「私」の心に入り込んでいたからだと思う。だから、「私」は、心が死んだようになり、「御嬢さん」から「妻」へと変わつたその人を不安にさせ、苦しめたあげく、自分で自分の命を消そうとまで考えるようになったのだと思う。「K」を自分ごと消そうとしたのだろう。でも、「妻」だけには話してみるべきだったし、又そうして欲しかつた。愛する人のことを理解できないことほど辛いことはないと思う。「私」は、知つたら苦しむと思っていたけれど、きっと何も知らないで、頼りにしているたつた一人の人がいなくなる方が何倍も苦しかつたはずである。

人の苦しみは、その人だけに留まらず感染してしまうのかもしれない。人を信じる心がその感染を食い止めることができるのだろう。「私」の一生から、それを感じたような気がする。



『こころ』 を読み終えて

2年 建築学科

柴田理恵

私はこの『こころ』を読み終えて、胸を締め付けられるような悲しい気持ちになると同時に、激しい憤りを感じた。それは、死という形でしか罪を償うことが出来ないというような後向きの考えを持って永い間生きてきた先生に対して生まれたものだった。

先生は金によって変わってしまった叔父を憎み、人間を信じることが出来なくなったと言ったけれど、それは裕福に育った人間の考え方だと私は思う。なぜなら、先生の少年時代は、時代が江戸から明治へと移り変わる一大改革の時期なのである。時代が変わると人々の生活も変化し、過度の労働を強いられるようになる人々もいるはずだ。そのような人々は、ただひたすら感情を押し殺して働き続ける。つまり、憎しみという感情を持つ先生は、そのような人々に比べると、よっぽど人間らしい生活を送っているということになるのだ。そんな苦労も知らずに、自分が辛い思いをして生きてきたと言わんばかりの口調で、のうのうと生きてきた先生が、私にはどうしても許せなかったのだ。私は先生に、もっと広いところを見る目をもって欲しかった。

次に、私はある疑問を抱いた。先生はKについて常に、彼は強い人であると言っていたのに、なぜKは自殺などしたのだろうか。そこまで考えて、私にはある考えが浮かんだ。Kと先生はとても長いつきあいなのである。つまり、Kは先生の性格を熟知していた。そして、自分が自殺したことで、先生がどれほど苦しむかということもわかっていたからこそ、自殺という形で愛する人を奪われた恨みをはらしたのではなかろうか。このように考えると、なるほど、Kは確かに強い人だったんだな、と思えるのだ。また、私は先生の死についても、疑問を抱いた。先生は自殺の理由を「明治の精神に殉死する」ということにしており、私にはそれがただの言い訳にしか聞こえない。もっともらしいことを並べ立てて、自殺を正当化しようとしたのではないだろうか。しかし、これは私の推測でしかない。本当のことはわからないけれど、私は先生に、寿命を全うすることのできなかったKの分まで生き続けほしかった。

私が全体を通して感じたのは、この物語全体を支配している明治の精神の重さであった。明治の精神、つまり、この古い考え方に基づいて成り立つ先生の考え方は常に悲観的で、殉死にしても、どうしてこんな風に考えることができるのだろうか、と私を悩ませた。平成の世に生きる私に、先生の“こころ”を理解することは無理なのであろう。しかし、先生の“こころ”にとりつかれた“わたくし”的に、時代を越えた今でも、多くの人が先生の“こころ”を求めてやまないから、この話は読み継がれているのではないだろうか。そして私も、いくら先生の思想を批判しても、先生の行い、先生の孤独な人生を叩くことはできないのだ。私は先生に勇気を持ってほしかったと言ったけれど、己の心の内をすべてさらけ出すことも、ひとつの勇気と言えるのではないだろうか。また、永い間己と戦い続けた先生の心が休まるのならば、自殺も許せるような気がするのだ。



『鼻』と ダイエット

4年 電子情報工学科

真弓敬志

この話を読んでいるうちに一つの思いが頭をよぎった。人間の多くは、常に理想を抱いて生きている。例えば「もし、この様になれば」等といった様に自分を改善しようと思っている。その証拠に女性のダイエット志願は毎年止まることを知らずよく耳にする。自分よりやせている人をうらやましく思いやせようとする。どこまでやせれば気が済むのだろうかと私は不思議に思う。これは、ほんの一例だが、人間が理想とコンプレックスとを同居させていることがわかる。

禅智内供は、自分の長い鼻に恥を感じ、コンプレックスを抱いていた。私もそうであるが、そういった部分に関しては、他人の噂が気になりとても敏感になる。今も昔も変わらないものだと同感した。鼻を短く見せようと鏡を見つめていたとあったが、この光景が頭に浮かび大変おかしかった。鼻を短くする方法があれば、嘘でもそれを信じ試してみる。正に現代のダイエットである。「やせる」と書かれてある商品に飛び付く女性そのものであると思った。

人は、他人の不幸を喜ぶ。もちろん同情が先であるとは思っている。そして、いざその不幸が遠ざかると

物足りなさすら感じる。この事が作品の中で読み取れる。内供の長かった鼻が短くなったとたん人々は、物足りなさを感じ、笑っていたからである。これに対し内供は、自分の鼻にうらめしさを感じるようになる。長かった鼻を努力して短くしたのに恨しく思っているのである。人間の心理とは妙なものである。

数日後、内供の鼻は元に戻った。この時、内供は「もう笑われまい」とつぶやきながら喜んでいた。こうして『鼻』は終わる。私は読み終えて次のように思った。人間は素が一番である。変に着飾る必要はない。「隣の花は赤く見える」という言葉があるように段々と他人に対してうらやましさが増し、コンプレックスを抱く。そうではない。あくまで人は人である。人の模倣を試みるのもいいかも知れない。しかし、直接的には何の解決にもならないと思う。自分のコンプレックスを長所又は、自信に変える努力をした方が立派であると思う。いわゆるプラス志向である。この考え方は非常に大切であると思う。『鼻』には、現代のダイエットと類似している部分が数カ所あり、頭の中で置き換えて考えると納得できる場合が多々見られた。



『黒い雨』 を読んで

4年 電子情報工学科
武藤直美

この作品は、閑間重松、シゲ子夫妻、そして姪の矢須子の三人の原爆投下後の生活を、描いている。

原爆が投下された時、重松は広島市内の駅で被爆し顔に火傷を負う。シゲ子と矢須子は爆心地から遠く離れた場所にいたため無事であった。

その後、三人で焼跡を歩き回る。この焼跡の惨状の描写が、とても細かく今まで私が見た写真や映像よりも生々しかった。

そんなある日、矢須子に見合いの話が持ち上がる。しかしその頃、矢須子は被爆者だというデマが飛び交い仲人は心配する。叔父である重松は矢須子の縁談をまとめたため、自分と矢須子の原爆投下時の日記を仲人に持たせようと清書を始める。

もうすぐ清書が終わろうとする頃、矢須子は原爆症に冒され、医師にも見放されるほど絶望的な状態で話は終わる。

最後は空を見上げる重松の、「今から七色の虹がか

かれば矢須子は助かる。」という言葉で結ばれているが、助かったのだろうか。私は助かって幸せな暮らしをしていることを願いたい。被爆者ではないのに被爆者だと言われ、彼女の受けた心の傷は計り知れない。

焼跡を三人で歩き回り、同じように黒い雨に打たれたのに、なぜ彼女だけが苦しまねばならないのか。私は彼女があまりにもかわいそうで、どんなに口惜しかったか、非常に胸がつまる思いであった。

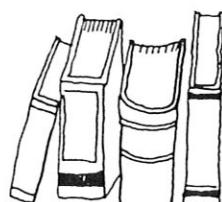
また、重松も矢須子の日記に描かれた焼跡の惨状に驚かされた。あまりにも表現が細かいため、本当に見ているかのように想像させられた。直立した黒焦げの兵隊や、全身大火傷で家族も判別できないような人々。こんなことが本当にあったのだろうかと、分かってはいても信じられなかった。

この作品を読み終えて、平和の大切さや核について考えさせられた。

私たちは今、当たり前のように平和に暮らしている。しかし、五十年前同じ場所で戦争が行われていたのである。平和に対して感謝するとともに、この平和を守っていかなければならないと思った。

今年は被爆五十年目や、中国・フランスでの核実験など世界中が核に注目している。核の実験に対しては多くの人が抗議している。なぜ実験する必要があるのか。もう核は使用してはならないのである。どうしてその事に気付いてくれないのか憤りすら覚える。

核の悲惨さや平和の大切さを知ることができた今、本当にこの作品を読んで良かったと思った。



審査を終えて

審査委員長 燃山廣志

今年度より図書館主催の読書感想文コンクールが始まった。その主旨や経緯については宮川英明図書館長の説明を待つことにして私は今回のコンクールの審査委員の一人として選考をした所感を述べさせてもらう事にする。

読書感想文と言うといつも思い出すことがある。私は高校時代を福岡県飯塚市にある嘉穂高校で送った。戦後の物資が不足している中で建てられた木造の校舎で三年間学園生活を送らなければならないと知った時、小、中学校が最新の設備のあるところで学んで来ただけに泣きたいような気持ちになった。(現在は飯塚市郊外に移転しモダンな校舎が建っている。) ところが、図書館だけがやけに立派なのである。建物自体が斬新で閲覧室には物陰となる柱が一本もない設計になっていた。しかも冷暖房完備で日曜も開館していたのである。また司書職員が三名常勤で生徒の読書相談に懇切に応じてくれていた。本を読むことがさほど好きではなかった私だが、この図書館の螺旋状の階段に足を踏み入れるその心の弾みは今でも鮮明に蘇ってくる。校舎が校舎だっただけにこの図書館の中は別世界のような錯覚に襲われた。それだけ当時の我々にはインパクトが強かったのである。今振り返ってみても当時の嘉穂高校の図書館活動は建物などのハード面もさることながら蔵書数、レファレンスサービス、視聴覚教材などソフト面も福岡県下では先進校であったと断言できるよう思う。

しかし良い面がある一方で、困った事があるのも世の常。私達、当時の高校生にとって有り難くない事があった。それは入学と同時に「読書ノート」なるものを全員購入させられ、そのノートの終わりの方には「嘉穂高校指定図書百冊」の紹介された一覧があり、図書館に行くとカウンターの近くに指定図書コーナーが特別に設置されていたように記憶する。これは私の性格に因ること大であるが、このように指定されるとそれだけで読もうという気力が失せ三年間で数冊しか手にしなかった。夏休み明けの感想文が強制で求められた時だけだったよう思う。だから「感想文」というと「指定図書」という連鎖反応が起き、提出しなくとも良いものならそのまま済ませたいと言うマイナスのイメージが固定されてしまったのである。今にして思え

ば読書指導に大変熱心な学校であったのにその学校の熱意が私にとってはかえって負担になり拒否反応を起していたように思え、何か口惜しさの残る青春の苦い思い出の一つである。

縁があって今、教壇に立つようになりしかも国語や国文学という教材を教える事になった時、心に決めたことがある。それは高専だから許される事でもあるけれど、自分が今まで邂逅した文学作品で思い入れのある作品、換言すれば学生に情熱を持って語れる作品だけを授業で取り上げたいということである。(ただしこれはあくまでも理想であって現実はなかなか思うように事は進まないのだが) 今回の読書感想文コンクールの応募対象とした作品リストもそういう思いで推薦した。

さて実際の応募作品を見ると自由応募の三、四、五年生の作品が著しく少なく、夏休みの課題としていた一年生の『地獄変』二年生の『こころ』の二作品を中心審査を進めなければならなかつたのは、今回が初回だっただけに予想していた事ではあったが、いささか残念であった。しかし感想文の出来そのものには私は大きな満足感を抱いている。他の審査委員の先生方も同様の感想を持たれているはずである。ここに入選作品十篇全てが掲載されているので熟読してもらえば、私の講評等不要であることが分かってもらえると思う。

よくどんな文章を書けば読書感想文になるのかとの質問を受ける。語弊があるかもしれないが、そんなものは無いと答えるようにしている。つまりその本と自分との出会いの感動を文章に出来れば自ずとそれが読み手に伝わると思うからである。裏を返せばそこに感動を伴わない一文は読み手にも説得力が無いということである。では、その「感動」とは、と問われそうだがそれは人として日々の生活を営んでいる以上誰にも持ち合せている感情である。これはその人の文学的資質の問題でもセンスの問題でもないと思う。文章力がないからとか読解力がないからとか理由にならない。自分の心を揺さぶるような本に出逢ったときの気持ちに他ならない。だからベストセラーが万人に感動を与える訳ではないことの証ともなる。要は自分と本との出会いが出来たか否かなのである。本を読む楽しみを

知らない人はこの出会いの喜びを知らない事と言ひ換えても良いと思う。だから文章は拙くても考察が浅くてもその感動が読み手に伝わればそれは感想文として体をなしていると考える。今回選ばれた十篇の作品はどれも十代の学生の瑞々しい感性で作品と正面から対峙しそこから生まれた「感動」を（それは必ずしもすばらしいと言う形容ではなくその逆かもしれない感情もある）力強く訴えている。今回の審査では審査委員一人ひとりにより評価が分かれ困難をきわめたやに思われたかもしれないがその予想に反してさほど入

選作品の選出には時間を要しなかった。つまり光っている作品は自ずと光を放ち続けているのである。高専というと「文学」とは懸隔した学校という見方が一般的だが、本との出会いに限ってはそうした見方は意味をなさない。

今回は高専生の持つすばらしい感性なるものを再認識させられた経験でもあった。審査の労を厭う以上にこうした感想文を読む機会を与えられた喜び、うれしさの方が強く心に残っている。来年度も更に学生諸君の多数の応募を願って止まない。

平成7年度読書感想文コンクール推薦図書 (50冊の本)

有明工業高等専門学校

	著者名	書名	出版社名等		著者名	書名	出版社名等
1	夏目漱石	こころ	文庫	26	中島敦	李陵	文庫
2	ク	坊ちゃん	ク	27	中勘助	銀の匙	ク
3	森鷗外	高瀬舟	ク	28	武者小路実篤	人生論	ク
4	武者小路実篤	友情	ク	29	桜井哲夫	ことばを失った若者たち	講談社新書
5	伊藤左千夫	野菊の墓	ク	30	川上あかね	わたしのオックスフォード	晶文社
6	芥川龍之介	鼻	ク	31	ロバート・フルザム	人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ	河出書房
7	ク	地獄変	ク	32	ジイド	狭き門	文庫
8	川端康成	伊豆の踊子	ク	33	シェイクスピア	ロミオとジュリエット	ク
9	梶井基次郎	檸檬	ク	34	トマス・マン	トニオ・クレーゲル	ク
10	太宰治	斜陽	ク	35	ウェブスター	あしながおじさん	ク
11	大岡昇平	野火	ク	36	アンネ・フランク	アンネの日記	ク
12	遠藤周作	沈黙	ク	37	オーウェル	動物農場	ク
13	有島武郎	生まれ出づる悩み	ク	38	湯川秀樹	旅人(湯川秀樹自伝)	ク
14	井伏鱒二	黒い雨	ク	39	ファラデー	ロウソクの科学	ク
15	井上靖	あすなろ物語	ク	40	向後元彦	緑の冒険	岩波新書
16	ク	天平の甍	ク	41	柳田邦男	恐怖の2時間18分	文春文庫
17	島崎藤村	破戒	ク	42	村上陽一郎	科学者とは何か	新潮選書
18	竹山道雄	ビルマの豊琴	ク	43	中谷宇吉郎	科学の方法	岩波新書
19	高野悦子	二十歳の原点	ク	44	木村哲人	発明戦争	筑摩書房
20	高樹のぶ子	光抱く友よ	ク	45	丹羽保次郎	電気をひらいた人々	東京電大出版
21	三島由紀夫	潮騒	ク	46	水島宣彦	エレクトロニクスの開拓者たち	電子情報通信
22	幸田文	流れる	ク	47	菊池誠	日本の半導体四〇年	中央公論社
23	有吉佐和子	華岡青洲の妻	ク	48	西垣通	マルチメディア	岩波新書
24	堀辰雄	風立ちぬ	ク	49	幸田露伴	五重塔	岩波文庫
25	山田詠美	晩年の子供	ク	50	西岡常一ほか	法隆寺を支えた木	NHKブックス

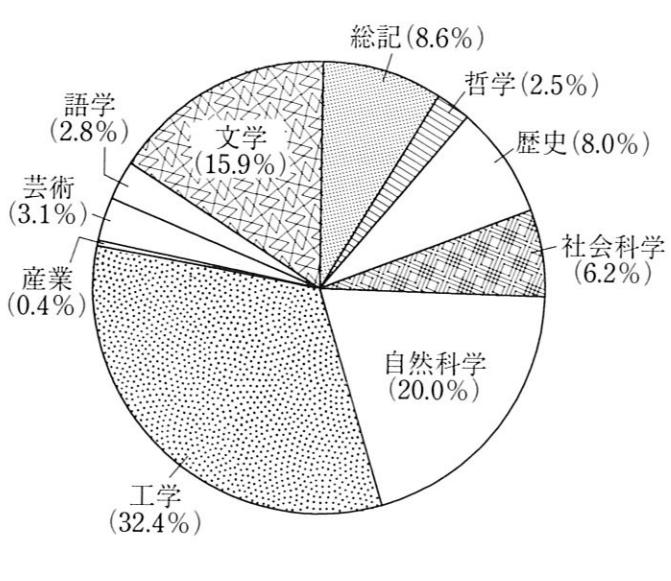
図書館統計

1. 藏書統計 (平成7年3月31日現在)

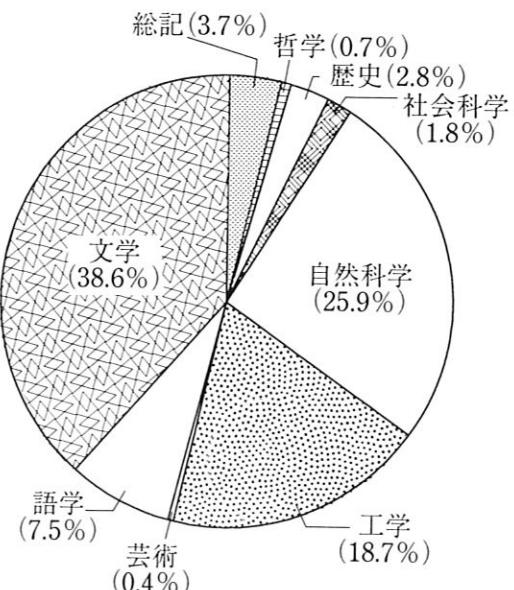
蔵書構成

分類		000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計
		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	
図書の冊数	洋	261	48	198	130	1,847	1,336	3	28	534	2,753	7,138
	和	5,219	1,515	4,861	3,771	12,102	19,628	262	1,869	1,684	9,649	60,560
	計	5,480	1,563	5,059	3,901	13,949	20,964	265	1,897	2,218	12,402	67,698
雑誌の種類数	洋	2	1	9	2	2	33	0	0	4	2	55
	和	22	2	2	7	15	83	0	15	6	11	163
	計	24	3	11	9	17	116	0	15	10	13	218

分類別蔵書割合「和書」



分類別蔵書割合「洋書」



2. 平成6年度利用状況

開館日数 238日

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
入館者数(人)	2,607	2,669	3,406	4,564	3,505	3,978	3,217	2,780	2,247	2,415	2,889	710	34,987
貸出冊数(冊)	264	398	478	415	140	290	308	449	308	486	567	144	4,247

夜間(午後5~8時)の入館者数および貸出冊数の占める割合はそれぞれ約22%、24%である。

3. 5年間利用統計

分類別貸出状況

分類	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	合計
平成2年度	122	79	62	49	613	1,152	6	531	50	626	3,290
平成3年度	138	25	53	32	662	841	2	607	18	230	2,608
平成4年度	140	11	27	30	607	908	0	260	23	263	2,269
平成5年度	160	51	50	33	763	1,599	2	312	24	530	3,524
平成6年度	143	60	49	47	706	1,979	8	390	50	815	4,247

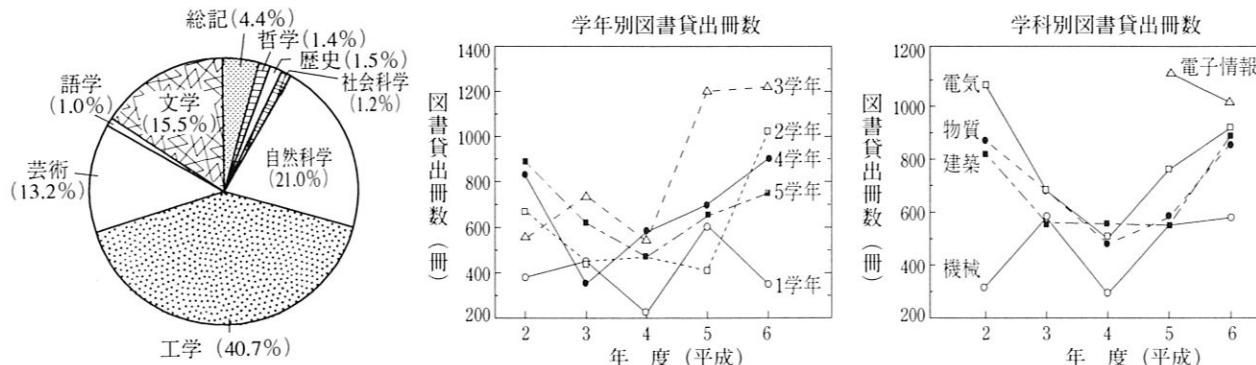
利用状況

年 度	学生数	開館日数	入館者数 総 計	1 日当り 入館者数	貸出冊数 総 計	1 日当り 貸出冊数	1 人当り 貸出冊数
平成2年度	921	294	16,408	55.8	3,290	11.2	3.6
平成3年度	964	293	9,817	33.5	2,608	8.9	2.7
平成4年度	998	286	7,191	25.1	2,269	7.9	2.3
平成5年度	1,024	245	9,715	39.7	3,524	14.4	3.4
平成6年度	1,013	238	34,987	147.0	4,247	17.8	4.2

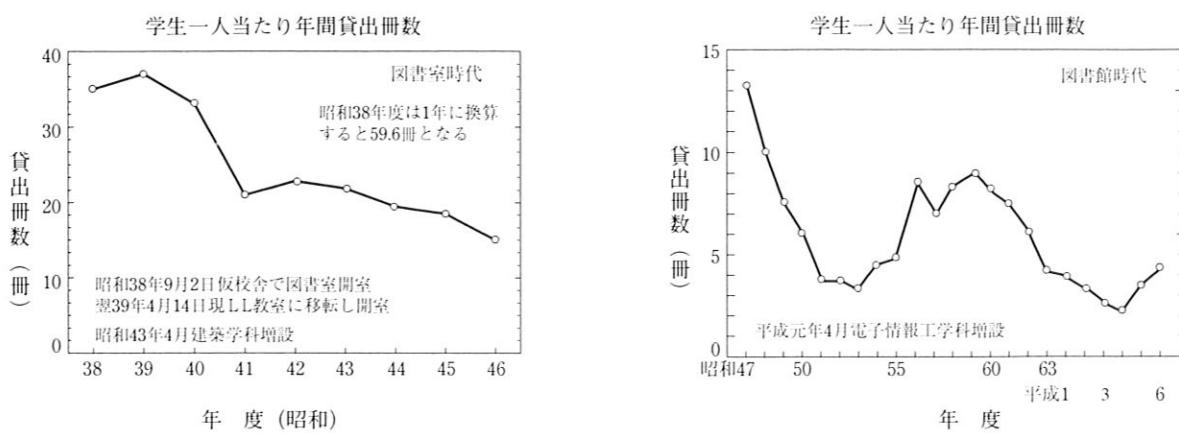
※平成6年度から入館者数のカウントは記入方式から赤外線によるカウント方式にかえた。

分類別貸出冊数割合

(平成2～6年度平均)



4. 創設時からの一人当たり貸出冊数の推移



図書館から

INFORMATION

スタッフ紹介

**◎図書の貸出冊数・
貸出期限が変わりました**

図書館では、学生諸君に1人でも1冊でも多く利用していただくため貸出冊数・期限等が大幅に改善されました。

内容は次のとおりです。

貸出冊数 1人5冊まで

貸出期限 2週間（14日間）

開館時間

平日（休暇中を除く） 午前8時30分～午後8時

（休暇中） 午前8時30分～午後5時

◎図書館利用について

- 図書館では他人の迷惑にならないように静かにしましょう。
 - 読んだ本は元の位置にもどしましょう。
 - 図書館内の飲食は禁止です。
 - 読み終えたら期限内でも早めに返却して下さい。次の人が待っています。みんなの図書館です。ルールを守り、気持ちよく利用しましょう。
- ※求める図書がない場合は係員に尋ねて下さい。必要があれば希望図書として申込んで下さい。申込用紙はカウンターに準備しています。

**◎年末・年始の
休館のお知らせ**

年末年始は下記期間休館となりますので、お知らせします。

閉館期間

12月28日(木)から1月3日(水)

新年は1月4日(木)からの開館となります。

皆さん良い新年をお迎え下さい。

平成7年度 図書館運営委員		
職名	氏名	所属学科
図書館長	宮川英明	共通専門
教務主事	瀬戸洋	一般科目
運営委員	田口紘一	機械工学科
タ	小沢賢治	電気工学科
タ	堀切淳一	電子情報工学科
タ	三浦博史	物質工学科
タ	玉野實	建築学科
タ	焼山廣志	一般科目（文）
タ	塚本祐右	タ（理）
タ	倉狩不二男	庶務課長

平成7年度 図書館俱楽部編集委員		
職名	氏名	学年学科
顧問教官	焼山廣志	（一般科目）
編集委員長	内村香	3年工業化学科
委員	橋口悟	2年電気工学科
タ	西原佐知	2年電子情報工学科
タ	長尾一也	1年機械工学科
タ	森木史子	1年建築学科

事務部

庶務課長	倉狩不二男
図書係長	宮川喜己
司書	宮本美沙子
タ	戸上清子

夜間開館要員

事務補佐員	福山円次
タ	龍香名

郷土の文化財

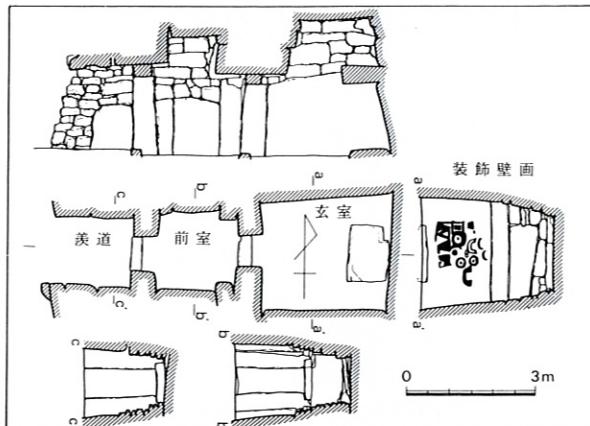
萩ノ尾古墳

高専正門をまっすぐに下ったT字交差点の手前左側に、国指定の史跡「萩ノ尾古墳」があります。この古墳は、装飾古墳で、日本で最初に見つかった記録が残っている（1692年）ことで有名です。学生諸君も登下校の途中で気付き、興味をもって小道を登った人もいるのではないかと思います。この古墳は、本校のキャンパスがある萩尾台地の西端に位置し、見晴らしのいい場所にあります。この位置から、西方にさらに400m下ると、全長約50mの前方後円墳である三ノ宮古墳もあります。遠い私たちの祖先が、諏訪川のほとりで水稻を栽培したり、有明海の幸を採ったり、この萩尾台の森で狩りをしたりしながら、自然と共に生活していた姿を想像すると、身近に感じられ、命のつながりというものを考えさせられます。

この古墳は今から約1400年前、6世紀後半代も終わりの時期に造られたと考えられています。直径19m高さ4mの円墳で、内部構造は、羨道（せんどう）、前室、玄室を備えた複室の横穴式石室で、真西に開口しています。装飾壁画は玄室の奥の壁に描かれています。ゴンドラ形の船や盾、円や三角文様が組み合わされた複雑なもので、鉄を主成分とした赤色の顔料を用いて描かれています。その素朴で力強い絵に、古代の人たちの謙虚さとたくましさが感じられます。

樹木も茂り見にくくなっていますが、本校図書館西側の煉瓦壁の濃淡模様はこの壁画を形どったものです。

（大牟田市教育委員会発行『大牟田市の文化財』昭和61年、『国指定 史跡 萩ノ尾古墳』平成4年を参考にしました。）



石室実測図（『大牟田市の文化財』より）



装飾壁画（大牟田市教育委員会の好意による）

編集後記

図書館と学生とを結ぶパイプ役として、新たに「有明高専図書館報」を発行することとなった。これを契機に図書館利用率がさらに伸びることを期待したい。学生編集委員によって発行されている「図書館俱楽部」は、身近な図書館情報誌として、今後も継続される予定である。どちらにもしっかり目を通し、活用してほしい。

この創刊号は時間的制約もありこのような形となったが、読書感想文コンクール入賞作品に救われたと感謝している。学友の作品をじっくり読んで頂きたい。

日本の若者は他の諸国と比べて不満度が高いという青少年意識調査結果がでた。その原因としてはいろいろなことが考えられると思うが、テレビのドタバタ劇に象徴されるようなうわべだけの享楽に惑わされ、一番大切な青年期に、読書による他者との出会いも、自己を見つめる時間も少ないのがその一因ではないだろうか。視野の狭さや独りよがりが不満に通じる。読書を通して色々な人と出会い、視野を広げてほしいと願っている。

有明高専図書館報 創刊号

平成7年12月15日 発行

編集 図書館運営委員会

発行 有明工業高等専門学校

〒836 大牟田市東萩尾町150
TEL 0944-53-1011(代)